

一房の葡萄

有島武郎



僕は小さい時に絵を描くことが好きでした。僕の通つていた学校は横浜よこはまの山やまの手てという所にありましたが、そこいらは西洋人ばかり住んでいる町で、僕の学校も教師は西洋人ばかりでした。そしてその学校の行きかえりにはいつでもホテルや西洋人の会社などがならんでいる海岸の通りを通るのでした。通りの海添いに立つて見ると、真青まつざおな海の上に軍艦だの商船だのが一ぱいならんでいて、煙突から煙の出ているのや、檣ほぼしらから檣へ万国旗をかけわたしたのやがあつて、眼がいたいように綺麗きれいでした。僕はよく岸に立つてその景色けしきを見渡して、家いえに帰ると、覚えていただけを出来るだけ美しく絵かに描いて見ようと思つて見ました。けれどもあの透きとおるような海あゐいろの藍色と、白い帆前船などの

みずぎわ
水際近くに塗つてある洋紅色とは、僕の持つている絵具ではど
うしてもうまく出せませんでした。いくら描いても描いても本
当の景色で見るような色には描けませんでした。

ふと僕は学校の友達を持つている西洋絵具を思い出しました。
その友達は矢張西洋人で、しかも僕より二つ位齡が上でしたか
ら、身長は見上げるように大きい子でした。ジムというその子
の持つている絵具は舶来の上等のもので、軽い木の箱の中に、十
二種の絵具が小さな墨のように四角な形にかためられて、二列
にならんでいました。どの色も美しかったが、とりわけて藍と
洋紅とは喫驚するほど美しいものでした。ジムは僕より身長が
高くせに、絵はずっと下手でした。それでもその絵具をぬる
と、下手な絵さえがなんだか見ちがえるように美しく見えるの
です。僕はいつでもそれを羨しいと思つていました。あんな絵

具さえあれば僕だつて海の景色を本当に海に見えるように描かいて見せるのになあと、自分の悪い絵具を恨みながら考えました。そうしたら、その日からジムの絵具がほしくつてほしくつてたまらなくなりました。けれども僕はなんだか臆おくびよう病になつてパパにもママにも買つて下さいと願う気になれないので、毎日々々その絵具のことを心の中で思いつづけるばかりで幾日か日がたちました。

今ではいつの頃ころだつたか覚えてはいませんが秋だったのでしよう。葡萄ぶどうの実が熟していたのですから。天気は冬が来る前の秋によくあるように空の奥の奥まで見すかされそうに霽はれわたつた日でした。僕達は先生と一緒に弁当をたべましたが、その楽しみな弁当の最中でも僕の心はなんだか落着かないで、その日の空とはうらはらに暗かつたのです。僕は自分一人で考えこん

でいました。誰かたれが気がついて見たら、顔も屹度きつと青かつたかも知れませんが。僕はジムの絵具がほしくってほしくってたまらなくなってしまうたのです。胸が痛むほどほしくなってしまったのです。ジムは僕の胸の中で考えていることを知っているにちがいないと思つて、そつとその顔を見ると、ジムはなんにも知らないように、面白そうに笑つたりして、わきに坐すわつている生徒と話をはなししているのです。でもその笑っているのが僕のことを知つていて笑つているようにも思えるし、何か話はなしをしているのが、「いまに見ろ、あの日本人が僕の絵具を取るにちがいないから。」といつてゐるようにも思えるのです。僕はいやな気持ちになりました。けれどもジムが僕を疑つてゐるようには見えれば見えるほど、僕はその絵具がほしくてならなくなるのです。

僕はかわいい顔はしていたかも知れないがからだ体も心も弱い子でした。その上臆病者おくびょうもので、言いたいことも言わずにすますような質たちでした。だからあんまり人からは、かわいがられなかつたし、友達もない方でした。昼御飯がすむと他の子供ほか達は活潑かつぱつに運動場うんどうばに出て走りまわって遊びはじめましたが、僕だけはなおさらその日は変に心が沈んで、一人だけ教場きょうじょうに這入はいっていました。ところが明るいだけに教場の中は暗くなって僕の心の中のようでした。自分の席すわに坐つていながら僕の眼は時々ジムの卓テーブルの方に走りました。ナイフで色々ないたずら書きが彫りつけてあって、てあか手垢まつくろで真黒まっくろになつていゝあの蓋ふたを揚あげると、その中に本や雑誌帳せきばんや石板せきばんと一緒になつて、あめ飴あめのような木の色の絵具箱があるん

だ。そしてその箱の中には小さい墨のような形をした藍や洋紅の絵具が……僕は顔が赤くなつたような気がして、思わずそっぽを向いてしまふのです。けれどもすぐ又横眼でジムの卓の方を見ないではいられませんでした。胸のところがどきどきとして苦しい程ほどでした。じつと坐つていながら夢で鬼にでも追いかけられた時のように氣ばかりせかせかしていました。

教場に這入る鐘がかんかんと鳴りました。僕は思わずぎよつとして立上りました。生徒達が大きな声で笑つたり唵鳴どなつたりしながら、洗面所の方に手を洗いに出かけて行くのが窓から見えました。僕は急に頭の中が氷のように冷たくなるのを氣味悪く思いながら、ふらふらとジムの卓テーブルの所に行つて、半分夢のよううにその蓋を揚げて見ました。そこには僕が考えていたとおり雑記帳や鉛筆箱とまじつて見覚えのある絵具箱がしまつてあ

りました。なんのためだか知らないが僕はあつちこちを見廻し
てから、誰も見ていないと思うと、手早くその箱の蓋を開け
て藍と洋紅との二色ふたいろを取上げるが早いかポケットの中に押込
みました。そして急いでいつも整列して先生を待っている所に
走って行きました。

僕達は若い女の先生に連れられて教場に這入り銘々の席に坐
りました。僕はジムがどんな顔をしているか見たくつてたまら
なかつたけれども、どうしてもそつちの方をふり向くことがで
きませんでした。でも僕のしたことを誰も気のついた様子がな
いので、気味が悪いような、安心したような心持ちでいました。
僕の大好きな若い女の先生の仰ることおっしゃなんかは耳に這入りは這
入つてもなんのことだかちつともわかりませんでした。先生も
時々不思議そうに僕の方を見ているようでした。

僕は然し先生しかの眼を見るのがその日に限つてなんだかいやでした。そんな風で一時間がたちました。なんだかみんな耳こすりでもしているようだと思ひながら一時間がたちました。

教場を出る鐘が鳴つたので僕はほつと安心して溜息ためいきをつきました。けれども先生が行つてしまうと、僕は僕の級きゆうで一番大きな、そしてよく出来る生徒に「ちよつとこつちにお出いで」と肱ひじの所を掴つかまれていました。僕の胸は宿題をなまけたのに先生に名を指さされた時のように、思わずどきんと震えはじめました。けれども僕は出来るだけ知らない振りをしていなければならぬと思つて、わざと平気な顔をしたつもりで、仕方なしに運動場うんどうばの隅すみに連れて行かれました。

「君はジムの絵具を持ってゐるだろう。ここに出し給たまえ。」
そういつてその生徒は僕の前に大きく拡ひろげた手をつき出しま

した。そういわれると僕はかえって心が落着いて、

「そんなもの、僕持つてやしない。」と、ついでたらめをいってしまいました。そうすると三四人の友達と一緒に僕の側そばに来ていたジムが、

「僕は昼休みの前にちゃんと絵具箱を調べておいたんだよ。一つも失なくなつてはいなかつたんだよ。そして昼休みが済んだら二つ失なくなつていたんだよ。そして休みの時間に教場にいたのは君だけじゃないか。」と少し言葉を震わしながら言いかえしました。

僕はもう駄目だめだと思うと急に頭の中に血が流れこんで来て顔が真赤まっかになったようでした。すると誰だったかそこに立っていた一人がいきなり僕のポケットに手をさし込もうとしました。僕は一生懸命にそうはさせまいとしましたけれども、多勢たぜいに無勢ぶぜい。

で迎^{とて}も叶^{かな}いませぬ。僕のポケットの中からは、見る見るマーブル球^{だま}（今のビー球^{だま}のことです）や鉛のメンコなどと一緒に二つの絵具のかたまりが掴み出されてしまいました。「それ見ろ」といわんばかりの顔をして子供達は憎らしそうに僕の顔を睨^{にら}みつけました。僕の体^{からだ}はひとりでにぶるぶる震えて、眼の前^{まつくら}が真暗になるようでした。いいお天気なのに、みんな休時間を面白^{面白}そうに遊び廻っているのに、僕だけは本当に心からしおれてしまいました。あんなことをなげしてしまつたんだろう。取りかえしのつかないことになつてしまつた。もう僕は駄目だ。そんなふうに思うと弱虫^{さび}だつた僕は淋しく悲しくなつて来て、しくしくと泣き出してしまいました。

「泣いておどかしたつて駄目だよ」とよく出来る大きな子が馬鹿にするような憎みきつたような声で言つて、動くまいとする

僕をみんなで寄つてたかつて二階に引張つて行こうとしました。僕は出来るだけ行くまいとしたけれどもとうとう力まかせに引きずられて階子段はしごだんを登らせられてしまいました。そこに僕の好きな受持ちの先生の部屋へやがあるので。

やがてその部屋の戸をジムがノックしました。ノックするとは這入はいつてもいいかと戸をたたくことなのです。中からはやさしく「お這入はいり」という先生の声が聞こえました。僕はその部屋に這入る時ほどいやだと思つたことはまたとありません。

何か書きものをしていた先生はどやどやと這入つて来た僕達を見ると、少し驚いたようでした。が、女の癖に男のように頸くびの所でぶつりと切つた髪の毛を右の手で撫なであげながら、いつものとおりのやさしい顔をこちらに向けて、一寸首ちよつとをかしげただけで何の御用という風をしなさいました。そうするとよく出来

る大きな子が前に出て、僕がジムの絵具を取ったことを委くわしく先生に言いつけました。先生は少し曇った顔付きをして真ま面め目にみんなの顔や、半分泣きかかっている僕の顔を見くらべていなさいましたが、僕に「それは本当ですか。」と聞かれました。本当なんだけれども、僕がそんないやな奴やつだということはどうしても僕の好きな先生に知られるのがつらかったです。だから僕は答える代りに本当に泣き出してしまいました。

先生は暫しばらく僕を見つめていましたが、やがて生徒達に向つて静かに「もういつてもようございます。」と行って、みんなをかえしてしまわれました。生徒達は少し物足らなそうにどやどやと下に降りていってしまいました。

先生は少しの間なんとも言わずに、僕の方も向かずに自分の手の爪を見つめていましたが、やがて静かに立って来て、僕の肩かた

の所を抱きすくめるようにして「絵具はもう返しましたか。」と小さな声で仰おつしやいました。僕は返したことをすっかり先生に知ってもらいたいので深々と頷うなずいて見せました。

「あなたは自分のしたことをいやなことだったと思っ
ていますか。」

もう一度そう先生が静かに仰つた時には、僕はもうたまりま
せんでした。ぶるぶると震えてしかたがない唇くちびるを、噛かみしめて
も噛みしめても泣声が出て、眼からは涙がむやみに流れて来る
のです。もう先生に抱かれたまま死んでしまいたいような心持
ちになつてしまいました。

「あなたはもう泣くんじやない。よく解わかつたらそれでいいから
泣くのをやめましょう、ね。次ぎの時間には教場に出ないでも
よろしいから、私わたくしのこのお部屋に入らっしゃい。静かにしてこ

こに入らつしやい。私が教場から帰るまでここに入らつしやいよ。いい。」と仰りながら僕を長椅子ながいすに坐すわらせて、その時また勉強の鐘がなつたので、机の上の書物を取り上げて、僕の方を見ていられましたが、二階の窓まで高く這はい上あがつた葡萄蔓ぶどうづるから、一房ひと房の西洋葡萄をもぎつて、しくしくと泣きつづけていた僕の膝ひざの上にそれをおいて静かに部屋を出て行きなさいました。

三

一時いちじがやがやとやかましかつた生徒達きょうとはみんな教場きょうじやうに這入はいつて、急にしんとするほどあたりが静かになりました。僕は淋さびしくつて淋しくつてしようがない程ほど悲かなしくなりました。あの位好きな先生を苦しめたかと思うと僕は本当に悪いことをしてしまつ

たと思ひました。葡萄ぶどうなどは迎むかへも喰たべる気になれないでいつまでも泣いていました。

ふと僕は肩を軽くゆすぶられて眼をさましました。僕は先生へやの部屋へやでいつの間にか泣寝入りをしていたと見えます。少し瘦やせて身長せいの高い先生は笑顔えがおを見せて僕を見おろしていられた。僕は眠つたために気分がよくなって今まであつたことは忘れてしまつて、少し恥しそうに笑いかえしながら、慌あわてて膝の上からすべり落ちそうになつていた葡萄の房をつまみ上げましたが、すぐ悲しいことを思ひ出して笑いも何も引込んでしまいました。

「そんなに悲しい顔をしないでよろしい。もうみんなは帰つてしまいましたから、あなたはお帰りなさい。そして明日あすはどんなことがあつても学校に来なければいけませんよ。あなたの

顔を見ないと私は悲しく思いますよ。屹度きつとですよ。」

そういつて先生は僕のカバンの中にそつと葡萄の房を入れて下さいました。僕はいつものように海岸通りを、海を眺めたり船を眺めたりしながらつまらなく家にいえ帰りました。そして葡萄をおいしく喰べてしまいました。

けれども次の日が来ると僕は中々学校に行く気にはなれませんでした。お腹なかが痛くなればいいと思つたり、頭痛がすればいいと思つたりしたけれども、その日に限つて虫歯一本痛みもしないのです。仕方なしにいやいやながら家いえは出ましたが、ぶらぶらと考えながら歩きました。どうしても学校の門を這入ることは出来ないように思われたのです。けれども先生の別れの時の言葉を思い出すと、僕は先生の顔だけはなんといつても見たくてしかたがありませんでした。僕が行かなかつたら先生は屹

度悲しく思われるに違いない。もう一度先生のやさしい眼で見られたい。ただその一事ひとことがあるばかりで僕は学校の門をくぐりました。

そうしたらどうでしょう、先まず第一に待ち切っていたようにジムが飛んで来て、僕の手を握ってくれました。そして昨日きのうのことなんか忘れてしまったように、親切に僕の手をひいてどぎまぎしている僕を先生の部屋に連れて行くのです。僕はなんだか訳がわかりませんでした。学校に行ったらみんなが遠くの方から僕を見て「見ろ泥棒うその嘘うそつきの日本人が来た」とでも悪口をいうだろうと思っていたのにこんな風にされると気味が悪い程ほどでした。

二人の足音を聞きつけてか、先生はジムがノックしない前に、戸を開けて下さいました。二人は部屋の中に這入りました。

「ジム、あなたはいい子、よく私の言ったことがわかってくれましたね。ジムはもうあなたからあやまって貰わなくつてもいいと言っています。二人は今からいいお友達になればそれでいいんです。二人とも上手に握手をなさい。」と先生はにこにこしながら僕達を向い合せました。僕はでもあんまり勝手過ぎるようでもじもじしていますと、ジムはいそいそとぶら下げている僕の手を引張り出して堅く握ってくれました。僕はもうなんといつてこの嬉しさを表せばいいのか分らないで、唯恥しく笑う外ありませんでした。ジムも気持よさそうに、笑顔をしていました。先生はにこにこしながら僕に、

「昨日の葡萄はおいしかったの。」と問われました。僕は顔を真赤にして「ええ」と白状するより仕方ありませんでした。「そんなら又あげましょうね。」

そういつて、先生は真白まっしろなりンネルの着物につつまれた体からだを窓からのび出させて、葡萄の一房をもぎ取つて、真白まっしろい左の手の上に粉のふいた紫色の房を乗せて、細長い銀色の鋏はさみで真中まんなかからふつりと二つに切つて、ジムと僕とに下さいました。真白い手の平ひらに紫色の葡萄の粒が重つて乗つていたその美しさを僕は今でもはつきりと思ひ出すことが出来ます。

僕はその時から前より少しい子になり、少しはにかみ屋でなくなつたようです。

それにしても僕の大好きなあのおい先生はどこに行かれたでしょう。もう二度とは遇あえないと知りながら、僕は今でもあの先生がいたらなあと思います。秋になるといつでも葡萄の房は紫色に色づいて美しく粉をふきますけれども、それを受けた大理石のような白い美しい手はどこにも見つかりません。

一房の葡萄

一房の葡萄

底本：「赤い鳥傑作集」新潮文庫、新潮社
1955（昭和 30）年 6 月 25 日発行
1974（昭和 49）年 9 月 10 日 29 刷改版
1984（昭和 59）年 10 月 10 日 44 刷

初出：「赤い鳥」
1920（大正 9）年 8 月号

入力：鈴木厚司
1999 年 2 月 13 日公開
2005 年 11 月 20 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。